

2010年(平成22年)6月24日

## 病院長からの一言

～附属病院高度救命救急センター開設式典～



弘前大学医学部  
附属病院長 花田 勝美



センター開設のテープカット



歓迎の式辞

な心境にあります。実際にセンターを預かる、浅利靖センター長、花田裕之副センター長、樋口三枝子看護師長を中心とするセンタースタッフのキビキビした活発な姿をみると頼もしさから不安は払拭されます。センターの見学会は、まず4月8日遠藤学長を始めとする役員に始まり、院内では4月19～20日のオープンルームが先駆けて行われました。5月13日には、センター設置関係者の皆様をお呼びしての盛大な記念式典がホテルニューキャッスルで行われました。当日は、文部科学省、関連大学、各界における代表者の方々を始め、青森県知事、弘前市長等のご臨席を賜りました。本センターの産み

弘前大学医学部附属病院「高度救命救急センター(以下センター)」は平成22年3月末日ついに竣工を迎えました。平成21年8月7日に着工を開始、わずか8カ月の突貫工事でした。この間、患者さん、職員、関係者の皆様には有形無形にご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。職員一同にとりましては、竣工の喜びとともに緊張と不安が入り混じる複雑

の親とも言える遠藤正彦学長からは設立の経緯あるいはご苦労話を伺え、格調の高い式典となりました。参加者は総勢約170名程、そのうち150名が施設見学を希望されました。近代的設備を備えた本センターに関心が高かったことが伺えました。本センターは、救急センターのなかった津軽医療圏の中で、休むことなく3次救急を受け入れることとなります。附属病院も診療機能の面から大きく様変わりすることとなります。

本センターには2つの大きな特徴があります。ひとつは、本県で唯一の「高度」救命救急センターであること。いまひとつは、遠藤正彦学長の強いご指導による「緊急被ばく医療」の機能を併せ持つことです。外来診療棟の屋上に設置されるヘリポートは、下北半島のむつ総合病院とわずか30数分

で結ばれます。近隣医療圏との距離はさらに短くなり、患者サービスは一段と向上することになります。センターとしての開業は7月1日からです。本センターの設置を機会に救急専門医が育ち、地元をしっかり定着してくれることを願わずにはいられません。(平成22年5月19日記)

## 各診療科の紹介

【地域連携室】



地域連携室は平成18年4月より開設致しました。本院の使命である「生命倫理に基づいた最先端の医療、医学教育及び研究を実践し、患者の心身に健康と希望をもたらすことにより、地域社会に貢献することである」に基づき、患者さんが安心して療養生活を過ごせるよう支援していくとともに、特定機能病院としての役割を果たしていくためにも各医療機関との連携を密にし、医療機関相互の機能分担を図れるよう日々業務に携わっております。スタッフは、医師1名(兼任)、看護師長1名、メディカルソーシャルワーカー2名の計4名のスタッフがお互いの専門知識と技術を発揮して協力しながら業務にあたっております。主な業務内容としては、退院支援業務、各種医療・福祉制度についての相談業務、看護相談業務、地域の医療・福祉関係者との連絡・調整業務、紹介患者返書サービス業務等です。開設当時に比べ、地域連携室への相談依頼件数は年々増加し、開設当時年間96件だった相談件数も平成21年度には年間800件超となっており、院内スタッフの方々や患者さん、地域の関係機関の方々にも広くご利用いただく機会が増えたと感じております。また、患者さんを取り巻く生活環境の多様化、高齢化などの社会背景に伴い、今後も更なる相談件数の増加が予想されます。限

られたスタッフ数で質の高い業務をどのように展開していくのが大きな課題となっています。そこで、地域連携室では平成21年度より入院時スクリーニングシートの導入を行っております。入院から3日以内に病棟看護師がスクリーニングシートを用い退院支援の必要性について評価を行い、早期介入が必要と思われるハイリスク患者については地域連携室にシートを提出するという流れになっております。スクリーニングシートの導入により退院支援が必要な患者さんに地域連携室が入院早期から介入することが可能となり、退院後の生活に目を向けた患者支援を病棟と一緒に取り組む事ができるようになったと感じております。今後も患者さんが安心して療養生活をおくれるよう、また、在院日数の短縮や地域における医療機関相互の適切な機能分担を図っていくためにもスタッフ一人一人が業務に取り組んで参りますので今後も地域連携室の業務にご理解とご協力を頂きますようよろしくお願い致します。

(文責 地域連携室 駒井朋子)

## 弘前大学医学部附属病院高度救命救急センター開設記念行事を開催



高度救命救急センター外観

弘前大学医学部附属病院では、このほど青森県内唯一となる高度救命救急センターの開設を記念して、5月13日に弘前市内のホテルで開設記念行事を執り行いました。

記念行事には、文部科学省大臣官房文教施設企画部の西阪昇部長、文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室の玉上晃室長、三村申吾青森県知事、葛西憲之弘前市長はじめ関係者約170名が出席し、盛大に高度救命救急センターの開設を祝いました。

記念式典では、花田勝美病院長が「本センターの大きな特徴として、青森県内唯一の高度救命救急センターであり、緊急被ばく医療の

機能を併せ持っている。センター設置を機会に救急専門医の育成の場として発展させ、医師の地元定着の拠点にするべく努力することが責務である。」と式辞を述べました。続いて遠藤正彦弘前大学長から挨拶と開設に至る経緯が述べられ、西阪文教施設企画部長、三村青森県知事、葛西弘前市長、村上秀一青森県医師会副会長による祝辞がありました。その後、浅利靖高度救命救

急センター長からセンターの概要について説明がありました。ついで、センターの建設等に携わった工事関係者へ花田病院長から感謝状が贈呈されました。

式典終了後、高度救命救急センター前においてテープカットが行われ、引き続き施設見学会が実施されました。見学者は担当者からの最新の施設設備に関する説明に耳を傾けていました。

祝賀会では、佐藤敬弘前大学大学院医学研究科長の挨拶の後、玉上晃大学病院支援室長の代読による新木一弘文部科学省高等教育局医学教育課長の祝辞、結城章夫山形大学長、杉本壽日本救急医学会代表理事の祝辞が述べられ、石戸谷一弘前大学特別顧問・医学部副学長による乾杯へと続き、記念行事は盛況のうち終了しました。



▲高度救命救急センター特殊処置室で浅利センター長の説明の様子

2年前でしょうか、卒後臨床研修センター運営委員会の提案により、研修プログラムに「メンター制度」なるものが導入されました。このメンターの語源は諸説あるようですが、メンティーと呼ばれる若年者や未熟者に対して、信頼関係を保ちながら継続的に仕事や様々な活動、さらには精神的な成長を支援する大人や熟練者を、メンターと呼ぶことが多いようです。弘前大学のメンター制度では、メンティー＝初期研修医、メンター＝優秀な指導医、ということにな

ります。とても格好の良いネーミングですが、医療の世界では、このメンターあるいはメンタリングという言葉が知られるようになるはるか以前から、医療知識・技術の伝授といった面で、いわゆる「師弟関係」が重要な意味をもってきました。仕事に行き詰まったとき、大学院への進学、留学、開業云々、人生の様々な節目で悩んでいるとき、師匠と尊敬する医師のアドバイスが、突破口としてあるいは決断に大きな影響を受けた方はたく

## 先憂後楽

メンターって知っていますか？



消化器内科・血液内科・膠原病内科  
教授 福田 眞作

さんいるはずですよ。ところが、卒後臨床研修制度が始まって以降、1～2月毎のローテーション研修が義務づけられ、研修医も指導医も、師弟関係を築くだけの十分な時間が与えられていません。そういった点を考慮して、この制度は導入されたのだと理解しています。しかしながら、研修開始前にこれから2年間もお世話になるメンターを指名することは、そんなに簡単なことではないでしょう。研修開始後でも構いません。メンター制度にこだわることなく、研

修医の皆さんには、是非ともそれぞれの診療科で数多くのメンターを見つけて欲しいと願っております。

このメンター、初期研修医に限ったことではありません。4月から院内のそれぞれの部門・部署で多くの新人さんたちが勤務を開始しています。それぞれの部署・部門には皆さんを見守り支える優秀なスタッフがたくさんいるはずですよ。すでに素晴らしいメンターに出会えているだろうと期待しますが、いかがでしょうか？

### 新任教授の自己紹介「放射線科学講座教授に就任して」



放射線科科長  
高井 良尋

この度、平成22年5月16日付けで弘前大学医学部附属病院放射線科を担当することになりました高井良尋と申します。

私は、山形県長井市という弘前と同様の雪国で生まれ、1976年に福島医科大学を卒業しました。卒業後、東京大学の放射線基礎医学教室に入り、大学院4年と助手3年の7年間、放射線生物学を学びました。その後、東北大学放射線科に入局し、臨床の放射線治療学、放射線腫瘍学のトレーニングを開始致しました。放射線科入

局1年後より1年9ヶ月間秋田県横手市の厚生連平鹿総合病院に放射線診断学も含めた放射線科医として勤務しましたが、それ以外はパイ中間子による臨床と基礎研究のカナダ留学も含め、full timeの放射線治療医としての診療と研究を行って参りました。

近年の放射線治療は、ピンポイント放射線治療と呼ばれる定位照射法、がん組織のみに線量を集中させ、周囲の正常組織の線量低減が可能となる強度変調照射法、それに粒子線治療など、極めて高精度で、機能温存可能な、患者さんに優しい治療となってきました。高齢化社会のがん治療の大きな柱になりつつあります。しかしながら、放射線治療を受けているがん患者さんは日本では25%弱に過

ぎません(米国65%)。日本のがん患者さんは放射線治療の恩恵を十分に受けているとはいえない現状があり、各科の先生方にご協力をお願いしてこの状況を少しでも改善していきたいと思っております。

また、放射線診断部門におきましては、MRI、CTの機器更新が行われ、より質の高い画像と診断の提供が可能となりつつありますし、また、IVRに関しては関連病院と共同して質の高い診療を提供しているようなシステムを作る所存であります。

放射線治療、放射線診断のスタッフらと力を合わせ、弘前大学医学部附属病院、青森県の放射線診療に貢献できるよう頑張りたいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

### 平成21年度ベスト研修医賞選考会開催

平成21年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成22年2月25日に医学部臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度から卒業臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回が6回目を迎えます。当日は、あらかじめ卒業臨床研修センター運営委員会により優秀研修医にノミネートされた五十嵐正

美先生(二年度)、石原佳奈先生(一年次)、田村良介先生(一年次)(五十音順)の3名の研修医が、「ここがポイント!研修医の心がけ」と題して、この1年間の研修生活で自分が重視してきた点について、一人10分間ずつスピーチを行いました。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと、参加した51名の学生諸君(この1年間臨床実習で研修医に間に近接してきた5年生が中心)による投票が行われ、石原佳奈先生が平成21年度ベスト研修医に選ばれました。

彰式が行われ、石原先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、五十嵐、田村両先生には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として、廣瀬勝己先生に「ベストパートナー賞」、岡本哲平先生に「レポート大賞」、鎌田順道先生に「セミナー賞」、廣瀬千穂先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会に移り、5年生から、今や恒例となった「ベスト指導医賞」、「ベスト6年生賞」の発表が本年も行われ、教職員も多数参加し盛会裏に終了しました。ベスト研修医賞は単に研修医のモチベーション向上に寄与するだけでなく、研修生活・臨床実習を通じて苦楽を共にしてきた研修医・学生間に、きずなを重視した「弘大式屋根瓦教育」が定着するために、大いに役立つものと思われま

(卒業臨床研修センター長 加藤博之)



▲花田病院長よりベスト研修医賞を贈呈される石原佳奈先生

### MRI更新：3台体制へ

老朽化のため永年にわたりご不便をおかけしていたMRI2台を、この度、最新型最上位機種種の3.0テスラMRIと1.5テスラMRIに更新しました。また、オープンタイプの0.3テスラMRIを新規に導

入し、新年度から3台体制になりました。

最新型最上位機種種のMRI2台は全身領域において限られた時間内に、ボリューム撮影、高い検査効率、超高速の画像再構成など、MRIに求められる様々な要素・機能を拡張したMRIです。超高磁場により高分解能高コントラスト画像が得られるため、頭部領域では今まで見えなかった末梢の血管が見えるようになったほか、撮像方法の改良により脂肪や金属アーチファクトに影響されない精密な診断も可能になりました。通常の検査のみならず、研究や教育にも役立つ仕様となっておりますので、是非活用していただきたいと思

のMRIはその名の通り開放的な作りになっており、今までMRIが苦手だった閉所恐怖症の患者さんでも、安心して検査を受けていただけます。

今回のMRI更新により、待ち時間の短縮とより精密な診断が可能となり、大学病院に求められている高度医療に対応するとともに、利便性の向上にも大いに役立つと思

(放射線部副部長 青木昌彦)



▲頭部MRA(3.0テスラ)



▲超高磁場MRI(3.0テスラ)



▲高磁場MRI(1.5テスラ)



▲オープンMRI(0.3テスラ)

### 坂田事務次官が弘前大学を視察

坂田東一文科科学事務次官が、去る4月26日に弘前大学を来訪しました。

坂田次官は、冒頭に遠藤正彦学長から本学の概要及び主要な取り組みについて説明を受け、今後の大学運営等について意見交換を行った後、学内施設を約1時間にわたって視察しました。

文京町地区にある産学官連携・社会貢献拠点施設の創設60周年記念会館「コラボ弘大」を視察した後、引き続き、附属病院高度救命救急センターを訪問し、浅利靖センター長から重症全身熱傷を治療するBCU(無菌室)や緊急被ば

く医療に対応した特殊処置室などの設備について、また、外来診療棟屋上に設置されたヘリポートではドクターヘリや防災ヘリによる救急搬送について説明を受けました。救命救急病棟病室内では、同センターが地域の救急医療に果たす役割の大きさや救命救急の現状や課題について積極的な質疑をするなど、坂田次官は救命救急に理解を深めるとともに強い関心を寄せていました。

なお、視察には、関崎徳彦文部科学省大臣官房総務課課長補佐が随行しました。



▲救命救急病棟病室で説明を受ける坂田次官ら



▲外来診療棟屋上のヘリポートで説明を受ける坂田次官ら

### 5月12日は看護の日〈看護週間に寄せて〉

看護の心、ケアの心、助け合いの心を、国民一人一人が育むきっかけとなるよう、ナイチンゲールの誕生日にちなみ、5月12日が「看護の日」と制定されました。看護部では、平成9年度から外来待合ホールに看護の日のお花を飾り、平成10年度からふれあい看護体験を実施する等、看護週間には「看護の心」を伝える活動を毎年行っています。

平成13年度からはメッセージカードを患者の皆さんへお届けしています。今年のカードのデザインは「モンステラの葉」でした。花言葉の「うれしい便り」を願って、一人ひとりにお贈りしました。また、外来待合ホールにはたくさんの花が咲きほこる「フラワーウォール」が飾られ、あたり一面がカサブラ

ンカの芳しいかおりで包まれました。メッセージカードに涙を流される患者さんもあり、看護週間は毎年「看護の心」を見つめなおす機会となっています。

(1病棟4階 木村淑子)



### 診療教授等の称号が付与されました

本院では診療に従事する教員及び医員のうち、各学会等による認定医、専門医又は指導医等で診療に関し優れた技術、能力等を有し、かつ、診療への貢献が顕著であると認められる者に対し、「診療教授」、「診療准教授」又は「診療講師」の称号を付与する制度を新設しました。

本称号は、当該教員等の優れた臨床能力等を評価するとともに、「実力のある医者に診察してほしい」と希望する患者さんからの信頼の向上に資することを目的としています。

本制度により5月1日付けで、診療教授11名、診療准教授12名、診療

講師11名の総勢34名に称号が付与されました。5月6日には、本院大会議室において、辞令交付式が行われ、花田病院長から一人一人に辞令を交付するとともに、「新しい制度を活用して診療と教育に従事し、社会貢献につなげてほしい。」と挨拶がありました。各称号の任期は3年となります。

(総務課)



▲診療教授の称号を受ける玉澤直樹准教授

### 【編集後記】

4月の弘前は意外に寒かった。岩木山が霞んで見える。北海道人の私でも寒いものは寒い。桜の開花は遅れてしまったが、初めて見る「弘前の桜」。噂に違わぬ見事に圧倒された。ピンクに染まったお堀と弘前城。待った甲斐があった。繁華と感動の宴も終わると、本院は、県内で唯一の「高度救命救急センター」開設記念式典を迎えていた。救急医療の最後の砦として、地域からの期待は高まるばかりです。7月からの正式運用開始へ向けて関係各位の努力は続いております。

連日、口蹄疫に関連した報道が世間を騒がせております。本稿が「南塘だより第58号」に掲載の折には、その終息あらんことを願って止みません。原稿をお寄せいただいた皆様に御礼申し上げます。

(広報委員 北脇清一)

### お詫び

南塘だより57号の「平成21年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式」の記事で、一部掲載写真に誤りがありました。関係各位には、ご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げます。